

研究所 だより

37号

明治学院大学 社会学部附属研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL 03-5421-5204・5205

メールアドレス issw@soc.meijigakuin.ac.jp

ホームページ <http://soc.meijigakuin.ac.jp/fuzoku/>

2023

所長ごあいさつ

ようやくコロナ禍から日常が戻りつつある23年度がスタートしています。本研究所も相談研究部門の研修等は、すべて対面型で実施することが計画されています。また調査研究部門も、新たなプロジェクト研究も含めて、国内外のフィールドに出向いていく調査計画がすでに動き出しています。ようやく社会学部の研究所にふさわしい研究活動が再開されることになります。一方コロナ禍では、オンラインでのコミュニケーションについては、その質量とも想像を超えて発展しました。その成果も、これからの研究所の活動では生かしていきたいと思っています。オンラインのコミュニケーションは、場所や時間を超えて、今まで関わりを持てなかった人たちともつながっていきける可能性を持っています。それを生かしたオンオフ双方向での活動の広がりを期待しています。

さらに最近では技術革新のスピードが目覚ましく、AI（人工知能）の急激な進化により、これまで想像していなかった事態が発生し、その影響を危惧する声も高まっています。技術と社会の関係性についてはこれまでもプロジェクト研究のテーマとして取り上げてきたところですが、今の時代に合わせて広く、深く研究していくこともこれから本研究所のテーマとして重要になってくると感じています。

社会学部附属研究所 所長 茨木 尚子

研究所各部門から

調査・研究部門

調査・研究部門の活動には2つの柱があります。ひとつは調査・研究プロジェクト（以下PJ）の実施・支援です。PJには、少人数で行う「一般PJ」（科研費等の外部資金による研究のための準備・補完、シンポジウム等の企画等の単年度の活動）と、両学科から相当数の教員たちが参加する「特別推進PJ」（規模によりA、Bの種別あり）の2種類があります。2022年度は4つの一般PJが実施されました。2023年度は6つの一般PJと1つの特別推進PJ（B）が走っています。もうひとつの柱は、講演会・研究会等の実施です。2022年度は、ライフストーリー研究、エスノメソドロジーの大御所である山田富秋氏（松山大学人文学部社会学科）をお迎えし、「リフレクシヴ・エスノグラフィーの実践：薬害HIV感染被害問題調査から」というタイトルで講演していただきました。いわゆる「薬害エイズ事件」

に関する初期の研究報告書を医師や被害者たちから痛烈に批判された後、新たな姿勢でとりくまれてきた研究の成果についてのお話しは、私たちの調査研究のあり方に関する深い反省を迫る刺激的内容でした。今後も、社会学部に所属する教員たちの研究活動の活性化に貢献するための運営に努めていきたいと思います。（主任：加藤 秀一）



2022年度講演会案内書

相談・研究部門

相談・研究部門では、①地域活動、②講座・研修活動、③研究活動を行っています。2022年度は、②の講座・研修活動として、2回の「地域創り担い手学習会」と「社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」を行い、多くのみなさまにご参加いただきました。

2023年度は、①②③の活動に加えて、新たに④卒業支援をスタートします。この活動は、「社会福祉分野の仕事をしている社会学部卒業生」を対象に行うものです。卒業生同士のネットワーク、実践の振り返りや学びの機会をつくり、社会福祉分野における実践をよりよくすすめるためのサポートをさせていただきます。

また、2023年度は、「地域創り担い手学習会」や「社会福祉

実践家のための臨床理論・技術研修会」をできるだけ対面で実施し、学びを深めるとともに、参加者同士の交流の輪を広げていきたいと思います。ホームページに加えて公式 SNS による広報も始めました。所員一同、今年度も、みなさまとともに学ばせていただきたいと思います。（主任：新保 美香）



2022年度ADV案内書

学内学会部門

明治学院大学社会学・社会福祉学会（通称：学内学会）は、本学社会学部の学部生・大学院生、教員、卒業生のすべてを構成員とする組織であり、社会学・社会福祉学を学び実践する各種の活動を通じて社会学部生の能力向上に役立てると同時に、本学社会学部について広く知ってもらおうことを目指しています。

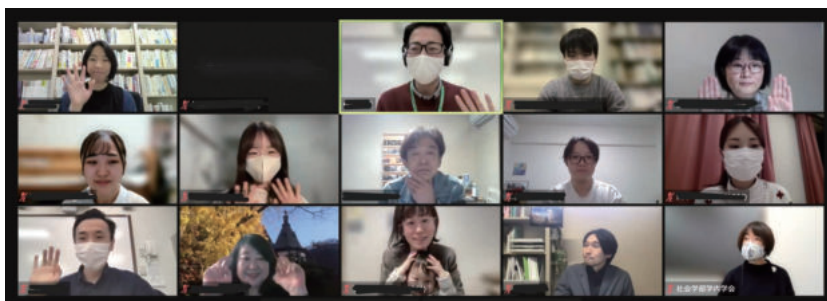
2022年度は、引き続きコロナ禍での活動制限下でありましたが、さまざまなイベントを行うことができました。以下に2つご紹介いたします。

2022年12月に実施した研究発表会は盛況な会となりました。3つの分科会で合計16件（ゼミ2件、実習クラス1件、個人13件）の発表が行われ、活発な議論が交わされました。

2023年3月には『Socially+』を発刊しました。学内学会は学術雑誌『Socially』の編集を1993年より続けてまいりましたが、この度、学生に寄り添

った機関誌と位置付けを新たにリニューアルしました。

2023年度もはじまり、学内学会学生会（通称 STEP）に新入生も15名ほど加わりました。コロナ禍の制限も徐々に解除されている状況です。安全を優先しつつも、充実した活動が行えるように盛り上げていきたいと考えております。引き続き、ご支援のほど、よろしくお願いいたします。（主任：松波 康男）



2022年度研究発表会様子

2022年度一般プロジェクト報告

「島」の記憶継承—硫黄島民2・3世の活動を中心に

本プロジェクトは、石原が顧問を務める「全国硫黄島島民3世の会」の執行部メンバーと石原を中心とした、共同調査研究である。以下、代表的な成果のみ記載する。

2022年度は、硫黄島民1世である奥山登喜子さんへのインタビューを実施し、『社会学部・社会福祉学研究』161号に、「硫黄島民1世・奥山登喜子さんのライフヒストリー——戦前の生活から、強制疎開と別離を経て、現在まで」（著者：石原俊・西村怜馬・羽切朋子・羽切学・渡邊英昭）を発表することができた。

また特筆すべきは、2022年11月16日に、3世の会主催での初のシンポジウム「帰れない島民 帰れない遺骨—硫黄島

の過去・現在・未来を考える」を本学で開催できたことである（基調講演者：浜井和史・酒井聡平、パネリスト：楠明博・羽切朋子・西村怜馬、オーガナイザー・司会：石原俊、主催者：全国硫黄島島民3世の会・本学国際平和研究所、後援：小笠原村在住硫黄島旧島民の会、本学社会学部附属研究所）。同シンポジウムは、硫黄島史の研究者、遺骨収集史の研究者、硫黄島戦没者、硫黄島における遺骨収集の担い手、故郷に帰れない硫黄島民2世・3世が登壇者として一同に会する、初めての場となった。シンポジウムは大盛況となり、読売新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞・北海道新聞などに、かなり大きな紹介記事が掲載された。（代表：石原 俊）

生活保護申請における相談対応の現状と課題—民間支援団体からの視点の考察—

新型コロナウイルス感染症の拡大により、生活困窮者支援施策を利用する人々の数は、想定をはるかに超えた。しかし、生活保護については利用者数に大きな変化がなく、生活保護に対する「忌避感」を持つ人々が少なくないことが明らかになった。また、生活保護申請の意思を持って福祉事務所に相談に訪れても申請ができず、民間支援団体の支援を受けて申請受理に至るなどの事例も報告されている。

本プロジェクトでは、生活保護申請における相談対応の現状

と課題を把握するとともに、申請時の相談対応がいかにあるべきかを明らかにすることを目的として、生活保護申請の同行支援等を行っている民間支援団体に所属する5名の支援者の協力を得てインタビュー調査を実施することができた。調査の分析結果と考察は、『研究所年報』第54号で報告予定である。支援者の語りからは貴重な示唆が得られており、協力して下さった5名の方々に、この場を借りて心から感謝申し上げたい。（代表：新保 美香）

訪問看護師の職業移行に関する定量的研究

訪問看護は人々の地域生活のために重要な意味を持つが、訪問看護師の労働環境を見ると職場定着や人材不足を指摘されることも多い。そこで、訪問看護師のキャリアや満足度を明らかにするために、本プロジェクトでは多分野（労働・医療・福祉）の研究者によって、質問紙調査（1000件配布、190回収）、インタビュー調査（9名、オンライン）を実施した。

データの分析は途上だが、現状での知見は以下の通りである。第一に、訪問看護師としてのキャリアに関して、早い段階

での知識・スキルの習得（大学教育や初職の研修）が重要である可能性がある。第二に、ステーションのなかには、「営業」や「事務」のタスクが訪問看護師に割り振られており、不満につながっている可能性がある。第三に、訪問看護師の業務満足度はいくつかの内容に区分できる。

コロナ禍の対応のなかで、調査に協力いただいた訪問看護師、およびステーションのみなさまには心からお礼を申し上げたい。（代表：米澤 旦）

多文化共生社会における外国人労働者の生活実態と支援の課題

「多文化共生社会における外国人労働者の生活実態と支援課題」に金圓景（代表）、武川正吾、平澤恵美で取り組んだ。本プロジェクトは、「地域外国人材受入れ・定着モデル事業」（以下、事業）を進めている北海道を中心に、外国人労働者の生活実態と支援の課題についてセミナーを開催した。セミナーには北海道庁・事業委託先の担当者、学外の関連研究者などが参加し、北海道で生活する外国人人材の実態と課題について意見交換を行った。その結果、入国前から北海道の地域特徴をはじめ雇用環境・生活環境などについて丁寧な説明が必要であること、また受け

入れ地域・企業側も異文化理解に向けて工夫する必要があることが明らかになり、外国人人材と受入側の認識に差があることが課題として把握できた。入国後は、外国人人材が北海道で安心して生活できるように方言を含めた日本語の学習機会を継続して提供する必要があること、また孤独を感じないように気軽に相談できる窓口や地域住民と交流する機会を確保する必要があることが明らかになり、事業終了後は誰がイニシアティブをとるか課題が残されていた。セミナーにご協力いただいたみなさまに心からお礼を申し上げたい。（代表：金 圓景）

「第 37 回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」 通称：アドバンストコース（ADV）

※予定のため変更の可能性があります。

テーマ：LGBTQ など性の多様性を尊重したソーシャルワーク実践に向けて
日時：2023 年 12 月 2 日（土）13:00～16:00
場所：本学白金キャンパス
講師：認定 NPO 法人 ReBit 代表理事 薬師実芳氏
プログラム：講演とグループでの演習

連絡先：

明治学院大学社会学部付属研究所 相談・研究部門
〒108-8636 港区白金台 1-2-37
メール ssoudan@soc.meijigakuin.ac.jp
TEL・FAX 03-5421-5205

公式 SNS はじめました

※読み取りが難しい場合は @syafuken で検索してください。

Facebook



Instagram



Twitter



地域創り担い手学習会報告

相談・研究部門は、2021 年度より「誰もが共に地域で自分らしく安心して暮らしていく」ことを目指し、活動していく方針を定めました。そこで 2022 年度の地域創り担い手学習会第 1 回は、昨年度の「高齢者福祉」をゆるやかに引継ぎ、『認知症の人の地域での居場所づくりに向けて』を ZOOM 使用によるオンラインで実施しました。続く第 2 回は『もっとも身近な相談相手としての民生委員児童委員の活動から学ぶ』と題し、社会的孤立を防ぐ取り組みについて学びました。第 2 回は数年振りに対面での開催が実現し、港区を始めとする地域住民の方にもご参加いただきました。学習会・研修会に関する詳しい情報は相談・研究部門 SNS をご覧ください。



話題提供の様子



グループでのワークの様子



第 1 回案内書



第 2 回案内書

2023 年度社会学部付属研究所 プロジェクトの紹介

一般プロジェクト

■リスク認識の環境正義に関する比較研究

（代表：藤川 賢）

■硫黄島民同郷団体史に関する資料基盤整備

：全国硫黄島民 3 世の会と協働して

（代表：石原 俊）

■ヒト生殖細胞系列のゲノム編集をめぐる

〈人々の形而上学〉の概念分析的研究

（代表：加藤 秀一）

■千葉県君津市上総地域の地域づくりとイタ

リアの小都市構想（チッタスロー）との関係

性に関する実証研究—ポジターノとアマル

フィを事例として—

（代表：岩永 真治）

■生涯学習政策における社会的統合の方法と

実際：デンマーク・成人教育センターの場合

（代表：坂口 緑）

■配偶子提供を伴う生殖医療技術に関する課

題の検討

（代表：柘植 あづみ）

特進プロジェクト

■複合的課題を抱えた人々に対する持続可能

な支援に関する研究

（代表：宮崎 理）

2023 年度社会学部付属研究所 スタッフの紹介

所 長	茨木 尚子
調査・研究部門主任	加藤 秀一
相談・研究部門主任	新保 美香
学内学会部門主任	松波 康男
所 員	岩永 真治
所 員	仲 修平
所 員	平澤 恵美
所 員	関水 徹平
所 員	佐藤 正晴
所 員	米澤 旦
所 員	宮崎 理
研究調査員（調査・研究部門）	稲毛 和子
ソーシャルワーカー（相談・研究部門）	竹沢 昌子
助 手	森 香苗
教学補佐	坂本 啓子
学内学会部門事務担当	二木 鈴香